

「ぬ」「ね」の識別

(番外)前期の(部分的)復習

二年 () 組 () 号 氏名 ()

●次の①～⑮の傍線部の説明として最も適当なものを後の群からそれぞれ選び、()内に記号で答えよ。

- () ① 風も吹きぬべし。
- () ② 山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草も枯れぬと思へばをかし。
- () ③ 浮きぬ沈みぬゆられけり。
- () ④ 日かすの早く過ぐるほどぞものにも似ぬ。
- () ⑤ 才と徳とを兼ねぬ。
- () ⑥ いかなる宿業のうたてさぞとのたまひて、ただ尽きせぬものは涙なり。
- () ⑦ よろづむつかじきも、御前にだに参れば、なぐさみぬべし。
- () ⑧ さらに来じとなむわれは思はぬ。
- () ⑨ この月のあかさに、君の御事思ひ出でまゐらせて、琴弾き給はぬことはよもあらず。
- () ⑩ 過ぎぬと聞きたびごとに、心は動く。
- () ⑪ あり経べき身にもあらぬば、いづちもいづちも失せなむとす。
- () ⑫ 一人一人にあひ奉り給ひぬ。
- () ⑬ 思ふままにも参らぬば、「おろかなる。」とも思すらむ。
- () ⑭ 住吉の神の導き給ふままに、はや舟出して、この浦を去りぬ。」とのたまはず。
- () ⑮ 女などこそさやうのもの忘れはせぬ、男はさしもあらず、

a	完了の助動詞	b	強意の助動詞	c	並列の助動詞
d	打消の助動詞	e	動詞の活用語尾		

「ぬ」「ね」の識別

二年 () 組 () 号 氏名 ()

●次の①～⑮の傍線部の説明として最も適当なものを後の群からそれぞれ選び、()内に記号で答えよ。

- () ① 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
- () ② すべて男をば女に笑はれぬやうにおほしたつべしとぞ。
- () ③ つゆまどろまれず、明かしかねさせ給ふ。
- () ④ かの大納言、いづれの船にか乗らるべき。
- () ⑤ 大納言詠み給へるぞかし。
- () ⑥ 胸のみふたがりて、物なども見入られず。
- () ⑦ 拷器の様も、寄する作法も、今はわきまへ知れる人なしとぞ。
- () ⑧ 木の葉の落つも、下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。
- () ⑨ 寝たる足を狐に食はる。
- () ⑩ 敦盛とて、生年十七にぞなられける。
- () ⑪ たきぎ負へる山人の花の蔭に休めるに似たり。
- () ⑫ 大将いとま申しつつ福原にこそ帰られけれ。
- () ⑬ よくせざらんほどはなまじひに人に知られじ。
- () ⑭ 頓阿法師のきざめる像となり。
- () ⑮ 物はおぼゆれども腰なむ動かれぬ。

a	存続(完了)の助動詞	b	自発の助動詞	c	可能の助動詞
d	受身の助動詞	e	尊敬の助動詞	f	その他

「ぬ」「ね」の識別

二年 () 組 () 号 氏名 ()

● 次の①～⑮の傍線部の説明として最も適当なものを後の群からそれぞれ選び、() 内に記号で答えよ。

- (b) ① 風も吹きぬべし。
- (a) ② 山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草も枯れぬと思へばをかし。
- (c) ③ 浮きぬ沈みぬゆられけり。
- (d) ④ 日かずの早く過ぐるほどぞものにも似ぬ。
- (e) ⑤ 才と徳とを兼ねぬ。
- (d) ⑥ いかなる宿業のうたてさぞとのたまひて、ただ尽きせぬものは涙なり。
- (b) ⑦ 「五六十町は山に入りぬらむ。」と思ふ。
- (d) ⑧ さらに来じとなむわれは思はぬ。
- (d) ⑨ この月のあかさに、君の御事思ひ出でまゐらせて、琴弾き給はぬことはよもあらし。
- (a) ⑩ 過ぎぬと聞きたびごとに、心は動く。
- (d) ⑪ あり経べき身にもあらぬば、いづちもいづちも失せなむとす。
- (a) ⑫ 「一人一人にあひ奉り給ひぬ。」
- (d) ⑬ 思ふままにも参らぬば、「おろかなる。」とも思すらむ。
- (a) ⑭ 住吉の神の導き給ふままに、はや舟出して、この浦を去りぬ。」とのたまはず。
- (d) ⑮ 女などこそさやうのもの忘れはせぬ、男はさしもあらず、

a	完了の助動詞	b	強意の助動詞	c	並列の助動詞
d	打消の助動詞	e	動詞の活用語尾		

「る」「れ」の識別

二年 () 組 () 号 氏名 ()

● 次の①～⑮の傍線部の説明として最も適当なものを後の群からそれぞれ選び、() 内に記号で答えよ。

- (b) ① 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
- (d) ② すべて男をば女に笑はれぬやうにおほしたつべしとぞ。
- (c) ③ つゆまどろまれず、明かしかねさせ給ふ。
- (e) ④ かの大納言、いづれの船にか乗らるべき。
- (a) ⑤ 大納言詠み給へるぞかし。
- (c) ⑥ 胸のみふたがりて、物なども見入られず。
- (a) ⑦ 拷器の様も、寄する作法も、今はわきまへ知れる人なしとぞ。
- (f) ⑧ 木の葉の落つも、下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。
- (d) ⑨ 寝たる足を狐に食はる。
- (e) ⑩ 敦盛とて、生年十七にぞなられける。
- (a) ⑪ たきぎ負へる山人の花の蔭に休めるに似たり。
- (e) ⑫ 大將いとま申しつつ福原にこそ帰られけれ。
- (d) ⑬ よくせざらんほどはなまじひに人に知られじ。
- (a) ⑭ 頓阿法師のきざめる像となり。
- (c) ⑮ 物はおぼゆれども腰なむ動かれぬ。

a	存続(完了)の助動詞	b	自発の助動詞	c	可能の助動詞
d	受身の助動詞	e	尊敬の助動詞	f	その他